《修士論文要旨》

防長無縫塔考

内　田　大　輔*

山口県は本州の最西端に位置し、古くから本州と九州を結ぶ要所として、南は瀬戸内海、北は日本海に挟まれたこの地理的な好条件を背景に産業・文化などの交流が盛んに行なわれてきた。また宗教面においても鎌倉時代末期には大内氏の臨済宗信仰が極めて尊い時であり、京都五山名僧との交流によって城下町山口は「西の京」として大いに栄え、華やかな大内文化が花開いた。防長地域の無縫塔は、室町時代前期頃より出現する。当初重制無縫塔であった無縫塔も様々な歴史的要因の中で、様々な無縫塔形式が生まれ、そして消えていく。本稿では、防長地域にみられる無縫塔形式を紹介し、その形式変遷から各無縫塔形式が生まれた歴史的背景、そして中世から近世へと時代が移り変わる姿を無縫塔形式の変遷過程からみていきたい。

防長地域の無縫塔は、15世紀前半の山口市・洞春寺無縫塔に始まり、防長地域に曹洞禅を広めた石屋真梁の防長進出までは、防長地域の無縫塔形式は重制無縫塔のみであった。それは臨済宗寺院を中心にみられ、当初無縫塔は臨済禅によって用いられていたことがわかる。防長地域における初期の頃の花崗岩製の重制無縫塔は、均整のとれた造りで関西にみられる八角形であること、そして大内氏が京都五山名僧との交流を盛んに行っていたこと等から、おそらく地元の防長石工の作ではなく関西系石工なかでも京都系石工の手によるものであろうと推測される。

洞春寺無縫塔などが造立されて間もなく、石屋真梁墓塔より防長式無縫塔が出現し、約300年間防長地域の無縫塔形式の主流となす。防長式無縫塔は、石屋真梁率いる石屋派の防長進出と同じくして無縫塔形式が重制無縫塔から防長式無縫塔へと変わることから、防長地域に曹洞禅を広めた石屋派曹洞禅が深く関与し、従前の臨済禅が用いてきた重制無縫塔との差異を明確にするため、防長式無縫塔が創作されたのであろうと思われる。初期の頃の防長式無縫塔は、球状台上部に配す蓮弁などが肉彫りで彫られ、塔身も背が低く縫目のないものであったが（防長式Ⅰ型）、16世紀に入り防長式Ⅰ型の簡略化された防長式Ⅱ型が出現し、16世紀末頃より当初曹洞禅のみに用いられてきた防長式が次第に浄土系宗派や有力武士層などにも浸透していき、幅広く防長式無縫塔が造立されることとなる。また分布も、初期の頃の防長式Ⅰ型では、長門市大寧寺や山口市泰雲寺など曹洞禅の一大拠点として栄えた名刹のみにみられていたが、防長式Ⅱ型になると山口市から周南市にかけての山口県中部に分布は集中する。これは防長式無縫塔が周南市四熊ヶ岳より産出する安山岩、通称「平野石」を主に使用して製作されていることから、防長式を製作した石工集団が同地に拠点を構えており、そのため生産地に近い山口県中部に分布が集中したと思われる。

またこの時代より、防長式無縫塔とは系譜を別にする新たな無縫塔形式が出現する。新形式で

平成17年度　*文学研究科文化財史料学専攻

あるC類無縫塔は、16世紀前半頃より出現し、慶長期（16世紀末～17世紀前半）に造立数は集中する。その形態は地方色はあるものの関西系の単制無縫塔を意識して造られた形態をしている。防長式無縫塔が曹洞禅を中心に造立されたのに対して、C類無縫塔はこれまで調査してきた感じから浄土系宗派を中心とてし造立されているように思われる。また分布が山口県北部を中心に分布し、その背景に防長式Ⅱ型の分布の背景と同じように、C類無縫塔が山口県北部の阿武郡福栄村（現萩市）の鍋山から産出する安山岩、通称「鍋山石」を使用していることから、同地にC類無縫塔を製作した石工集団が存在し拠点を構えており、そのため生産地に近い山口県北部に分布の中心があるのだろう。他無縫塔形式D類などのように16世紀末から17世紀後半にかけていくつかの地方色をもつ無縫塔形式が出現しており中世から近世へと時代が移り変わる時期の防長石工の模索がみてとれる。

17世紀末頃より防長地域の無縫塔の様相は大きく変わり、全国的にみられるような斉一化された無縫塔形式がこれまで防長地域にみられた無縫塔形式に変わって主流とてる。またこれまでの無縫塔形式が、比較的軟質な安山岩や砂岩を使用して製作されてきたのに対して、17世紀末以降の無縫塔はほぼ花崗岩製一色となる。その背景には、萩城築城に際して市宝家に代表される大坂石工が何組か防長地域に入り、大坂石工による防長石工への花崗岩加工技術の伝授や関西の単制無縫塔形式の紹介によって次第に防長石工は全国的にも斉一化された単制無縫塔を製作し始め、防長特有の無縫塔形式はその姿を消えていったのであろう。また幕藩体制の成立過程から流通体制・経路の整備などによって関西などから商業資本が防長地域に流入してきたこと、また出稼ぎ石工などモノのみならずヒトの防長流入などによってさらに防長地域の無縫塔の様相が大きく変わっていったと考えられる。ここに、防長地域において宗教色を色濃く残す中世的なものから、宗教色が薄れ、商品として普及する近世的なものへと、石塔に対する思想が変化する過程を無縫塔形式の変遷過程から垣間見ることができる。